

神戸女学院「由起しげ子文庫」資料紹介  
「女性の文化と女流の文学」座談会

(折口信夫・平林たい子・由起しげ子 司会：白田甚五郎)

藏 中 さ や か<sup>\*1</sup> 碓 井 美 沙 季<sup>\*2</sup>

Publication of the Document from Kobe College “YUKI Shigeko Collection”  
Catalog Number ‘Other Items #27’: “Round-Table Talk About Woman’s Culture and Novels”

KURANAKA Sayaka<sup>\*1</sup> USUI Misaki<sup>\*2</sup>

---

<sup>\*1</sup> 神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授

<sup>\*2</sup> 神戸女学院大学大学院 文学研究科 比較文化学専攻 博士前期課程修了

連絡先：藏中さやか 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科  
kuranaka@mail.kobe-c.ac.jp

## 要 旨

本稿は神戸女学院大学図書館が管理する「由起しげ子文庫」資料番号【その他27】「『女性の文化と女流の文学』座談会」を活字化して公にするものである。

当該資料は、縦書き原稿用紙（19.5 cm × 13.5 cm、「悠久原稿用紙」二〇〇字詰）二〇九枚（右上端部仮綴じ）に、本行鉛筆書きで一行おきに記される。表紙記載事項より、雑誌『本流』第二号掲載のために開催された折口信夫、平林たい子、由起しげ子による座談会（司会は臼田甚五郎）の筆録であることがわかり、その開催は、記される発言より由起が芥川賞を受賞した翌年の1951年4月26日のことと考えられる。速記記録を原稿化し完成原稿とすべく対談者間で回覧中であったが、鉛筆および黒ペンによる補入、加筆等の状況から、臼田、平林がそれぞれ加筆訂正を行い由起の手元に届けられた段階で作業が中断したものと推察される。折口、平林の未発表原稿として、資料的価値が認められるが、未定稿であることから全体に緊密さを欠き、首尾一貫しない発言や当該資料内には記されない人名や事柄を受けた発言も含まれる。

なお、『本流』は1950年2月に創刊号が刊行された「折口信夫責任編集」の雑誌である。國學院大學折口信夫博士記念古代研究所によれば、休刊していた『國學院雑誌』の代替えの位置づけで刊行されたもので、第二号以降は未刊とのことである。

**キーワード：**由起しげ子、折口信夫、平林たい子、臼田甚五郎、『本流』

## Abstract

This is the typescript for the original manuscript of “Round-table talk about woman’s culture and novels”. It belongs to YUKI Shigeko Collection, Kobe College, catalogue number ‘other items #27’. The round-table talk is thought to have been held on April 26, 1951, presided by USUDA Jingoro. ORIGUCHI Shinobu, HIRABAYASHI Taiko and YUKI Shigeko took part in this talk. It was planned for publication for the magazine *Honryu*, No. 2, though it was not published.

**Keywords:** YUKI Shigeko, ORIGUCHI Shinobu, HIRABAYASHI Taiko, USUDA Jingoro, *Honryu*

「女性の文化と女流の文学」座談会（折口信夫・平林たい子・由起しげ子 司会：臼田甚五郎）

藏中さやか  
碓井美沙季

はじめに

本稿は本学図書館が管理する「由起しげ子文庫」資料番号【その他27】  
「女性の文化と女流の文学」座談会」を活字化して公にするものである。

当該資料は、縦書き原稿用紙（19・5 cm×13・5 cm、「悠久原稿用紙」  
二〇〇字詰）二〇九枚（右上端部仮綴じ）に、本行鉛筆書きで一行おき  
に記される。表紙記載事項より、雑誌『本流』第二号掲載のために開催  
された折口信夫、平林たい子、由起しげ子による座談会（司会は臼田甚  
五郎）の筆録であることがわかり、その開催は、記される発言より由起  
が芥川賞を受賞した翌年の一九五〇年四月二六日のことと考えられる。

『本流』は一九五〇年二月に創刊号が刊行された「折口信夫責任編集」  
の雑誌である。國學院大學折口信夫博士記念古代研究所によれば、休刊  
していた『國學院雑誌』の代替えの位置づけで刊行されたもので、第二  
号以降は未刊とのことである。

当該資料は、速記記録を原稿化したもので、完成原稿とすべく対談者

間で回覧中であつたと推察される。鉛筆および黒ペンによる補入、加筆  
等の状況から、臼田、平林がそれぞれ加筆訂正を行い、由起の手に届  
けられた段階で作業が中断したものと考えられる。折口、平林の未発表  
原稿として、資料的価値が認められるが、未定稿であることから全体に  
緊密さを欠き、首尾一貫しない発言や当該資料内には記されない人名や  
事柄を受けた発言も含まれる。なお、由起の発言の一部は、藏中さやか  
「作家由起しげ子の輪郭」（『女性学評論』第三一号 二〇一七・三）で  
紹介した。

【付記】 本稿は二〇一六年度神戸女学院大学研究所の総合研究助成によ  
る研究成果の一部として、平林たい子、由起しげ子両氏の著作権継承者  
および学校法人神戸女学院の許可を得て公表するものである。雑誌『本  
流』については、本学図書館より國學院大學折口信夫博士記念古代研究  
所に照会をおこない、小川直之先生よりご教示を得た。記して御礼申し  
上げる。

凡例

- 一 字体は、適宜、通行の字体に改め、発話者名は太字で記した。
- 一 改行位置は、適宜、改めた。改ページ位置は『で記し、( )でページ数を右傍に算用数字で記した。
- 一 本行および右傍の「？」は全て鉛筆で、塗抹や書き込みは黒ペンで記されているが、これらの筆記具については特に注記しない。
- 一 原表記が確認できる取り消し線、見せ消ち、塗抹は二重取り消し線で示し、鉛筆による塗抹は、塗抹字数と同数の■で示した。傍記、書き込み等は可能な限り忠実に記入した。
- 一 鉛筆による、補入および加筆、訂正は( )で本行中に記した。
- 一 黒ペンによる補入は、《 》で記した。原表記を塗抹して訂正した部分が長く、右傍に記入できない場合も、《 》で本行中に記した。
- 一 原表記の上から黒ペンで訂正を重ね書きしている文字および原表記の文字に一部加筆した文字は、本行に二重取り消し線を引かず、右傍に《 》で訂正後の字を記した。
- 一 原表記の上から黒ペンで字体明記のための重ね書きをしている文字は、太字で記した。
- 一 判読不明箇所は、不明字数と同数の□で示した。
- 一 特に原表記に不審のある場合のみ、右傍に(ママ)と記した。
- 一 空白がある箇所は、空白字数等を「」で記した。
- 一 例外的な事項は、適宜、漢数字で注番号を付し、注記した。
- 一 指示線や傍書中の書き損じ、訂正塗抹箇所は一部割愛した。

表紙

四月二十六日  
本流 第二号

「女性の文化と女流の文学」座談会

出席者

文学博士 折口信夫先生

小説家 平林たい子先生

小説家 由起しげ子先生

《白田は編輯部とする事》

《司会者》 田田重五郎氏

本文

編輯部  
白田

それでは今日の座談会の進行を述べさせていただきます。ちよと御挨拶を申し上げます。本流の第1号は、「女性の文化と女流の文学」について主題にいたしまして、編輯する予定なんではございますが、本日は、「平林」さんと由起さんのお見えを頂きまして、それらの諸般の問題をいろいろ伺いすることになると思うのですが、折口先生は御存知のように、日本の女性の問題と、それから女流文学の運命というものについて、非常に「深い動察をお下しになっておられます。そして又従来何人もその及ばなかった面について、女性の将来というものについての御考察を伺いたいと思っております。お見え頂いていられるのであります。その折口先生を中心にいたし」まして、当代の一番女流文学の将来を形成するお二人様と、そういう現代の問題について懇談して頂きたい。「本日は、」を丸で囲み、本文二行目「女性の文化と女流の文学」の前に移動する指示線あり。

と思います。特に日本の文学者の中、平安朝時代は、女流文学の時代と言われておりましたわけで、再び我々の上にも文芸復興が来たときに、女性の方によってそういう日本を作って頂きたいと。特に今の日本における差し迫った運命の中では、女性の力によって永遠の平和というものがもたらし得る何ものかを含んでおるのではないかと』ということさえも私は考えているわけなのでございまして、ざつくばらんいろいろの問題を論じて頂きたいと思うのでございまして。で女流の文学というものが、現代の日本の文学者の中でも、明治には樋口一葉、與謝野晶子さん、それからこの間の戦争最中に岡本かの子さんが出たくなって、確かに日本の文学の内容を豊富へに下さしましたのですが、今後の日本の文学の運命を築き上げて行く上において、平林さんはどういふうな方面で、ど』という意図でもってこの女流の文芸復興をもたらして下さるような役割を果たして頂けるものか、一つお伺いしたいと思うのでございまして……。「一行空白」

**平林** どうもそういう抱負がないのでございまして。(笑声)「一字空白」実際ちつとも意識しないで、非常に本能的に小説を書いておりまして、女、男ということも意識してないのでございまして。だからそう改まつておっしゃられると』何にも申上げることがないので、本当に恥しいのでございまして『けれども、ないということがお答になるのでございまして……。

**白田** まあ戦後に随分もりくと言つてもよい程にいろくお書きなりました、その中』の一つの流れの中には、非常に人間の**二**本能的な欲求と

二「人間の」を丸で囲み、「非常に」の前に移動する指示線あり。

申しますか、本能という《と》ちよつと《違った感じになります》根源的な使命の求めるところです。そういう**二**本能的な欲求、そういうものを持っている人間というものを何かお書きなされたように拝見』しておるのでございすけれども、或いはあの《地底の歌》や、或いは『終りに立つ証人』でございましてね。ああいうものを拝見いたしますという、曾ていわゆるプロ文学の□□□□として出て来たことと加え併せて見ますとい』うと、そういうものを基礎として実際の人間というものの象形を始めておられるように思われるのでございすけれども、何か特にそういう思うところかあつて、ああいうお仕事をなさつておるのでございすでしょうか。』

**平林** そういうわけではないのでございすけれども、私十年ばかり病氣をして田舎に引込んでおりまして、私さういふ自分のやって来た仕事や、それから**他人の**曲分の長い間の仕事というものを本当に考えて見たのでございす。さういふ下から、人がすでに言つて分つておたこととすけれども何《といふ》か自分の気持の上皮見たいなものばかりをつつ突いて来たと思ひますものですから、本当に自分の声というものを、人が何と言おうと構わず投げ出』して行つてみようかと、さうしたものをというより本心とを決心して田舎から出て来たのでございす。それがどういふ**中上げますし意**あるとか、さういふことに立つてゐるのではないのでして、意識的にはある思想や何かが入つてゐるか』も知れませんが、《作品として》自分を投げ出すときには、**その一度下にある私の心は廣が広がりますので**全く思想的な論及といふものは

三 本行は英単語のカタカナ書き力。「チャムピオン」は黒ペンによる上書き。さらに右傍に鉛筆で「英語」と記載。

何々の主義とか思想とかいふ割り切れたものがない混雑(混雑)の  
ないのでございます。非常に文化的なものでございます。こういうより外  
にないのでございます。

**白田** それは私が今申上げた元本(マタ)的な欲求(17)というものの、やはり繋つ  
ているように思えるのでございますけれども、それで由起さんは、又昨  
年芥川賞をおとりになった「本の話」以来でございますか。その小説の  
お出しになりましたのは……。(18)

**由起** その前に「脱走」というのを書いたのでございますけれども、と  
にかく書き始めの動機なんです、全然小説を書く気なんかなかったの  
でございますけれども、八木岡さんが小説というものを書いてごらんな  
さいと言わ(19)れたから、小説というものはどんなものかと申上げたら、  
小学校の綴方を書くように書けばよろしいというものですから、私綴方  
の積りで書いておったのであります。だから私の小説といたら、私も  
不思議な気がしておる(20)くらいだったのですけれども、いつまでもいつ  
までもそんなことを言ったらおかしいと思ったから、今ではそんなこ  
とを言わないようにしております。それでも、去年から今年までの間に  
は、随分そういう意識が深まって(21)参りましたわけで、その気がなかっ  
たと思うというような、そういう整理をして、翻訳いたしておるような  
気持から、やはりはつきり書くものなら書きますという、そういう気持  
になって参りました。(22)

**白田** それと今長編に出をお出しになっていらつしやいますね。長編を  
お書きになるには、やはり今のお話のはつきりした意識ですね。それは  
どういう点を狙っておられるのでしょうか。一つ今後の長編の発展と共  
に、そ(23)の意識が尚はつきりするのございましょうかを大体お伺いさ

せて頂けると……。

**由起** 狙うということは、私は大体いろ／＼なことが入って書いている  
のではなくして、これに得て生きるということも含めて探して(24)いるよ  
うな状態でございますから、それは長編を書きたいというようなこと  
は、正確に考えてやったことではなくして、もっと急いでできればそれ  
に越した「一字空白」ことはないのでございますけれども、やはり書こ  
うと思うだけで(25)は長くなりそうですから、それに切れないでしょう。  
だからやはり長編で書いておいた方がよいと思つて、途中で行き詰つた  
らしうがありませんけれども、そういうものを書き上げたいと思つて  
おりました。(26)

**白田** それでは一つ折口先生。日本の文学書の中で、女流作家と申しま  
すか、そういうふうな専門の小説が意識を持つて、女性が出て来たとい  
うのは古くからなんでしょうか。新らしいことなんでしょうか  
しょう(27)か。で先程ちよつと出ました、平安朝時代の女性でございます  
ね。ああいう人達が物語を書いている意図というものは、どんな風だつ  
たのですか。

**折口** 別に我々が小説家というふうな気持(28)ではないでしょうね。歴史  
を書くのと同じ積りで、歴史の幾らか上のものは、小説ならば大衆小説  
というふうな態度でしょうね。歴史を書く積りでしょうね。歴史を書く  
積りだけでも、或る人の名前を隠しておくとか、或(29)いはいろ／＼な  
モデルというふうな意識ではなく、いろ／＼な事件を集めて来て、ごっ  
ちやにして一つのことにして書くとかというふうにして書いているので  
しょうね。だから小説意識というものが、書いているところとは(30)変つ

ているでしょう。従来大体日本では小説意識というものが樋口一葉当りでも同じだと思う。一葉なんか恐らくお金があつたら、幸福な結婚して小説なんか書かなかつたでしょうね。お金がなかったから一葉は書いたのだ<sup>(31)</sup>。こんなことを言つたら、一葉びいきな人に叱られるかも知れないが、あれより先には行はないと思う。あの文体を自由に現わしてみたいという欲望の方が主ではないかと思う。西鶴見たいな、ああいう文体を考えない先輩<sup>(32)</sup>から受取つたのだろうけれども、大部違います。あの文体を現わそうという欲望で書いたのだろうと思うから、そういうことは、やはり大して本当に小説意識ではないと思う。小説意識がある、ないということは、平林さん<sup>(33)</sup>のお話になつた通りで、小説書くこともその人の才能の問題もあるし、小説なんというのは、自分はよく書いていると思つても、不立派なものができるといふこともあるでしょうね。紫式部なんというのは、歴史書く積り<sup>(34)</sup>でいるから割合に正確に書いている。自分の知っている歴史だとか、実際の人だとかがなかったら、あれだけ正確に書けなかつたと思います。だから小説書く積りで、歴史を書く積りで書いているから、だからあれだけでき<sup>(35)</sup>たと思います。併し、書きたい、作りたいという欲望を起すときになつて、初めて小説意識が出て来ると思います。朝顔日記を書いた当時の、むしろあれぐらいから、本当に小説ができて来るのじゃないかしら。モデル家自<sup>(36)</sup>体が殖えているのに、その時代の古い言葉で書こうとした点で失敗したんだけれども、江戸の浅草以前というような、あれだけの本当の小説が意識を持つてゐるだろうと思う。併し、一葉までは小説意識を持つて書かなかつ<sup>(37)</sup>たからしようがないという人もあつたから、小説じゃないかと思

う。例えば「竹くらべ」というようなものは小説ではないと思う。「別れ道」見たいのは本当に小説になつて来るのだけれども、本当にちよつと小説の筋があるだけで<sup>(38)</sup>、やはり一葉的な文章を書いている。だから何といつても小説の意識あるなしに拘わらずできたものが小説であるといふことの方が意味があるのだと思います。

白田 平林さんが今お書き初めになつてい<sup>(39)</sup>る宮中物と申しますか、今のところ昭憲皇太后<sup>(40)</sup>に手をつけていらつしやるようでございますけれども、今まで「地底の歌」のような、ああいうような封建的な社会の人間を追及して来た。その中の型に対して、型の都合とか、そ<sup>(41)</sup>ういふ何か関連があつて出て来たのですか。どういふところからなのでございましょうかね。

平林 いえそういうわけではないのでございます。非常に常識的な動機で書き出したの<sup>(42)</sup>でございします。御下さつてめればわかりますが、それは「昭憲皇太后」の中の昭憲皇太后が実際の真相とは少し違つているのでございします。《ゆれども、実際の事実は、英照皇太后と二人で馬車に乗つて、お堀に落ちたのでございしますゆれども、馬車というものに馴<sup>(43)</sup>れないで落ちたゆれどもを人が助けるのです。ところが助けた方が罰せられたといふことを聞いて、ちよつと面白い《ヒューマニズムの》問題だと思つたのでございします。ただ七枚ぐらいのコントで、格別にいろ／＼含めて書く積りはなかつたので<sup>(44)</sup>「ございしますけれども、書くうちにああいうふうになつてしまつたので、本<sup>(45)</sup>当にそ<sup>(46)</sup>ういふ宮中という<sup>(47)</sup>もの<sup>(48)</sup>は、私<sup>(49)</sup>は全然存じませんし、そういうわけじゃないのでございします。本<sup>(50)</sup>主<sup>(51)</sup>に外国人と日本の皇室のことを書<sup>(52)</sup>いた<sup>(53)</sup>と思<sup>(54)</sup>ひ。《それも手に入つたものはわづかにで

2. ☐ 3. ☐ 4. ☐ 5. ☐ 6. ☐ 7. ☐ 8. ☐ 9. ☐ 10. ☐ 11. ☐ 12. ☐ 13. ☐ 14. ☐ 15. ☐ 16. ☐ 17. ☐ 18. ☐ 19. ☐ 20. ☐ 21. ☐ 22. ☐ 23. ☐ 24. ☐ 25. ☐ 26. ☐ 27. ☐ 28. ☐ 29. ☐ 30. ☐ 31. ☐ 32. ☐ 33. ☐ 34. ☐ 35. ☐ 36. ☐ 37. ☐ 38. ☐ 39. ☐ 40. ☐ 41. ☐ 42. ☐ 43. ☐ 44. ☐ 45. ☐ 46. ☐ 47. ☐ 48. ☐ 49. ☐ 50. ☐ 51. ☐ 52. ☐ 53. ☐ 54. ☐ 55. ☐ 56. ☐ 57. ☐ 58. ☐ 59. ☐ 60. ☐ 61. ☐ 62. ☐ 63. ☐ 64. ☐ 65. ☐ 66. ☐ 67. ☐ 68. ☐ 69. ☐ 70. ☐ 71. ☐ 72. ☐ 73. ☐ 74. ☐ 75. ☐ 76. ☐ 77. ☐ 78. ☐ 79. ☐ 80. ☐ 81. ☐ 82. ☐ 83. ☐ 84. ☐ 85. ☐ 86. ☐ 87. ☐ 88. ☐ 89. ☐ 90. ☐ 91. ☐ 92. ☐ 93. ☐ 94. ☐ 95. ☐ 96. ☐ 97. ☐ 98. ☐ 99. ☐ 100. ☐ 101. ☐ 102. ☐ 103. ☐ 104. ☐ 105. ☐ 106. ☐ 107. ☐ 108. ☐ 109. ☐ 110. ☐ 111. ☐ 112. ☐ 113. ☐ 114. ☐ 115. ☐ 116. ☐ 117. ☐ 118. ☐ 119. ☐ 120. ☐ 121. ☐ 122. ☐ 123. ☐ 124. ☐ 125. ☐ 126. ☐ 127. ☐ 128. ☐ 129. ☐ 130. ☐ 131. ☐ 132. ☐ 133. ☐ 134. ☐ 135. ☐ 136. ☐ 137. ☐ 138. ☐ 139. ☐ 140. ☐ 141. ☐ 142. ☐ 143. ☐ 144. ☐ 145. ☐ 146. ☐ 147. ☐ 148. ☐ 149. ☐ 150. ☐ 151. ☐ 152. ☐ 153. ☐ 154. ☐ 155. ☐ 156. ☐ 157. ☐ 158. ☐ 159. ☐ 160. ☐ 161. ☐ 162. ☐ 163. ☐ 164. ☐ 165. ☐ 166. ☐ 167. ☐ 168. ☐ 169. ☐ 170. ☐ 171. ☐ 172. ☐ 173. ☐ 174. ☐ 175. ☐ 176. ☐ 177. ☐ 178. ☐ 179. ☐ 180. ☐ 181. ☐ 182. ☐ 183. ☐ 184. ☐ 185. ☐ 186. ☐ 187. ☐ 188. ☐ 189. ☐ 190. ☐ 191. ☐ 192. ☐ 193. ☐ 194. ☐ 195. ☐ 196. ☐ 197. ☐ 198. ☐ 199. ☐ 200. ☐ 201. ☐ 202. ☐ 203. ☐ 204. ☐ 205. ☐ 206. ☐ 207. ☐ 208. ☐ 209. ☐ 210. ☐ 211. ☐ 212. ☐ 213. ☐ 214. ☐ 215. ☐ 216. ☐ 217. ☐ 218. ☐ 219. ☐ 220. ☐ 221. ☐ 222. ☐ 223. ☐ 224. ☐ 225. ☐ 226. ☐ 227. ☐ 228. ☐ 229. ☐ 230. ☐ 231. ☐ 232. ☐ 233. ☐ 234. ☐ 235. ☐ 236. ☐ 237. ☐ 238. ☐ 239. ☐ 240. ☐ 241. ☐ 242. ☐ 243. ☐ 244. ☐ 245. ☐ 246. ☐ 247. ☐ 248. ☐ 249. ☐ 250. ☐ 251. ☐ 252. ☐ 253. ☐ 254. ☐ 255. ☐ 256. ☐ 257. ☐ 258. ☐ 259. ☐ 260. ☐ 261. ☐ 262. ☐ 263. ☐ 264. ☐ 265. ☐ 266. ☐ 267. ☐ 268. ☐ 269. ☐ 270. ☐ 271. ☐ 272. ☐ 273. ☐ 274. ☐ 275. ☐ 276. ☐ 277. ☐ 278. ☐ 279. ☐ 280. ☐ 281. ☐ 282. ☐ 283. ☐ 284. ☐ 285. ☐ 286. ☐ 287. ☐ 288. ☐ 289. ☐ 290. ☐ 291. ☐ 292. ☐ 293. ☐ 294. ☐ 295. ☐ 296. ☐ 297. ☐ 298. ☐ 299. ☐ 300. ☐ 301. ☐ 302. ☐ 303. ☐ 304. ☐ 305. ☐ 306. ☐ 307. ☐ 308. ☐ 309. ☐ 310. ☐ 311. ☐ 312. ☐ 313. ☐ 314. ☐ 315. ☐ 316. ☐ 317. ☐ 318. ☐ 319. ☐ 320. ☐ 321. ☐ 322. ☐ 323. ☐ 324. ☐ 325. ☐ 326. ☐ 327. ☐ 328. ☐ 329. ☐ 330. ☐ 331. ☐ 332. ☐ 333. ☐ 334. ☐ 335. ☐ 336. ☐ 337. ☐ 338. ☐ 339. ☐ 340. ☐ 341. ☐ 342. ☐ 343. ☐ 344. ☐ 345. ☐ 346. ☐ 347. ☐ 348. ☐ 349. ☐ 350. ☐ 351. ☐ 352. ☐ 353. ☐ 354. ☐ 355. ☐ 356. ☐ 357. ☐ 358. ☐ 359. ☐ 360. ☐ 361. ☐ 362. ☐ 363. ☐ 364. ☐ 365. ☐ 366. ☐ 367. ☐ 368. ☐ 369. ☐ 370. ☐ 371. ☐ 372. ☐ 373. ☐ 374. ☐ 375. ☐ 376. ☐ 377. ☐ 378. ☐ 379. ☐ 380. ☐ 381. ☐ 382. ☐ 383.

4. 水

イシ

712

、米

 $\leq$ 

坑 亡

2

III



連愁

11

11

1



信念に對して《は》（57）そういうものではない。生活に徹したものですから。  
ないかと『思ひます。結局日本の女の作家の』粒は《さう》大きくないのでござい  
ますけれども、真剣に生きているという感じがするのでございませう  
どもネ。

白田 由起さんからも、この間伺ったのですが、そういう新しい文学と  
いうものは、従『来』（58）の職人的な立場に立つて書き進む人は到底残ってし  
まって、むしろ全然違った土壤（59）から出て来る人の方に、或る意味の期待  
がかけられるという点も確かにあると思うのでございませうけれども、由  
起さん、先程から小説をお『書き』（60）になった動機も伺ったのでございま  
すけれども、由起さんを創造しているもの、それはやはり鼎新（61）なりか「赤  
い部屋」など」を見ますというと、西欧的な思想というものが自然に生  
み出したもののように出ておりますのですが、そういうお『方』（62）によつて、  
又一つ日本の女流文学史が新しい廿《意》義を加えたという時が来た  
ように思うのでありますが、その辺での由起さんが、どういう役割を果  
されるかという何か自覚をお持ちでいらつしやいますか。何かその辺の  
御『意見』（63）を一つ伺いさせて頂きたいと思ひます。

由起 私こういうことを申しますの大変可笑しいことかも知れませうけ  
れども、よく批評の中に教養があるとかということをお書きになる方が  
ございませうけれども、そういうこととおっしゃられるのは、本当に私  
は意外だと思ひます。自分のためにも意外だし、世界のためにも意外だ  
と思ひます。それは世界からでも見たら分ると思ひますけれども、文学  
にしろ教養と名前をつけられる程私は知つて『いないのでございませう。』

## 五 「土壤」の「壤」を鉛筆で丸く囲む。

その知らないものをやつとこさで書いているものを、人の目に教養とい  
うふうに取りられるのは、余程教養というものは程度の低いものではない  
かと思ひます。だから若しも小説でも書こうて、何も『小説』（64）のため  
にそれだけの学問をしなければならぬ、そういうものではないので  
しょうけれども、いろ／＼な外国の小説のことなんかを思ひますと、い  
ろ／＼な知識がもつと高いものがあつて、読んでいても読みごたえが  
す『る』（65）と思うのでございませう。そこに出て来る言葉の端々でも、何でも  
もつと行き渡つた知識というものが窺えると思うのですけれども、そう  
いうようなものが余り問題にされていぬような気がするのです、どうな  
んでしょうね。『私は外の方は知らないのですけれども、とにかく自分  
がそんなことを一言でも二言でも、皆様から御批評を頂く度毎に、余り  
の意外さに驚いてしまふのです。そんなことで、書く小説とか人間に對  
して、そんな言葉が与えら』れる（67）というところは何か間違つてゐるのじや  
ないかと思ひますネ。何かの標準が狂つてゐるのじやないかと思ひま  
す。それは御質問の答えにはならないかも知れないけれども……。これ  
は少し長くなりましたけれども、外国の『人達』（68）が言つてゐる教養とい  
うものは、こんな程度のものでないと思ひます。本に言つておりました  
けれども、もう少し専門のことに關しても、しつかりした答えができる  
ようなものを持つてゐる人が教養があるというのじやないでしやう  
か。余り何も知らないでゐる者に、そんなことを皆が考えるといふのは  
変じやないかと思ひます。

白田 先程のお話にも出ましたように、利休の話が出て来たのですが、六

## 六 「利休の話」は当該原稿内に記載無し。

河森<sup>7)</sup>〈盛〉さんが日本<sup>70)</sup>の中の人で知識人と言える知識人を挙げるとい  
うと、利休というお話でございました。そういうお話が outcome、その  
利久<sup>72)</sup>という人は、芸術家としての一面が植っていると同時に、奇行家の  
ように生れている一面が話に出て<sup>71)</sup>来るわけで、それが商人的な魂で行  
われているが、芸術家として貫いたのか、■■■■非常に疑問になるとい  
うことが、今話題になっておたわけでございますけれども、その際由  
起さんが、とにかく商人ならいい加減なもの<sup>72)</sup>を意義あるもののように  
鑑定して、芸術家だったら、金儲けだとか、政治的な意欲だとか、い  
ろ／＼なことを考えている時間がないのじゃないかという、非常にはっ  
きりした純粹なお話が出ておたわけでございますが、まあ<sup>73)</sup>由起さんの、  
商人の中に入れば物の見方というものがやはり隅々まで溢れていると  
思うのでございますが、それは教義<sup>74)</sup>とか何とかということと別にして、  
物の見方にそういうことが出ていると、確かにそういうことが日本<sup>74)</sup>の  
女性じゃないかという情緒的なものを期待されているような日本文学、  
そういう情緒的なものだけで、すべて続けられなさたら、それは女流  
文学の振興というものは期待せられてよいものだと思いますけれど、  
今後の<sup>75)</sup>女性文学というようなものについて、先生の御意見、特にこの  
平安朝時代には、ああした男性を圧して、あれ程の作品を生み出したあ  
のときの条件、それから現在の女性作家が負わされている条件と、どこ  
に道があるか。一<sup>76)</sup>『一歴史的な観点から伺いたいと思います。』  
**折口** 私は利休でも、利休がやはり曾って持っておた富というものを、  
を、立どころに拵えたあの時代は、やはりああいうものを、室町から織  
田、豊臣へかけて、あの豪華な時代<sup>77)</sup>は、持つてなくても持つててもと

にかく大きな富が入って来ることになっているから、富の力というか、  
成金の力、それで何でもしていると思う。だからあの時の私に感じたこ  
とでも、或いはあなたなんか見まして、あの豪<sup>78)</sup>華さというものは、私  
はやはり本心的なものじゃないと思います。そう言う悪いけれども普  
通の人が考えているようなものじゃない。つまり時代が持っている富の  
力を押し出したうまさに溢れている。だから利久<sup>79)</sup>も余り豪華<sup>79)</sup>で、成金  
主義であるが、併し、世間ではそうは言わない。そう言わないのは、疑  
問などは持っていないし、責める世間も勿論ないと思う。あの力で押し  
出した芸術も、それがその次には元禄<sup>80)</sup>になって来ているけれども、元禄<sup>80)</sup>  
にはやはりあれだけ偉い人が出て来るということも、やはりその時代が  
よかったからということとは誰も言っていない。とにかく富の力があれば  
押し出したと、つまり成金時代が押し出したのだから、今見たいな考え  
をする<sup>81)</sup>というそんな時代から、こういうものができることがない。だ  
から評価を軽く見ては■■いけないと思う。だから利休という者は、利休  
の堺の商人として持った富が、利休の元になっている。極く低く見て利  
休に対する評価<sup>82)</sup>とい<sup>82)</sup>うものは、やはり利休が持っておた富が利休の  
背景になっている。極く低く見て利休に対する評価<sup>83)</sup>とい<sup>83)</sup>うものは、やは  
り利休が持っておた富に掛けて評価していると、それは利休の評価と  
全然違った面だから、批評する<sup>83)</sup>人はそれを勝手にして批評している。  
だから由起さんに反問するけれども、しげ子さんの住んでおた家庭と  
いうものが、やはり世間が由起さんを非常に高い教養を持っているとい  
うように見てかかっているのだと思う。直<sup>84)</sup>ぐに批評<sup>84)</sup>とい<sup>84)</sup>うものを持ち  
出したからネ。例えば芝居の役者に「二字空白」<sup>85)</sup>（河井<sup>85)</sup>）武末<sup>85)</sup>（雄）と

いう役者があつた。又喜多村緑郎というのがあつたが、喜多村を何でも九州じや旧の文学だというふうにいつでも批評するネ。吉右衛門と菊五郎を比べる』<sup>(85)</sup>という、片一方は派手で、片一方は地味だというふうな批評できない。吉右衛門は派手な中に地味なところがあり、菊五郎は地味の中で派手なところがあるから、批評家の批評に変わらない。批評の方に入らない。だから私は『批評家がそういうふうならば、批評家であればうまい批評で、我々が信頼して、作家達が本当にその批評の言うことを元にして進んで行つてもよいのだけれども、一葉みたいなことになる。そういう意味で感心させられる方』<sup>(87)</sup>が少い。いろ／＼やはりそういうふうに一諸の方に早まつた批評をしているのだし、作家自身はよく頭の中へ入っているから分るかと思う。作家は自分の家だけしか知らないから、男の作家は女の作家を軽蔑するようになる』<sup>(88)</sup>と思う。作家には外の生活の途がない。だから自分の作品も途がないということになる。だから男の作家の非常に先輩達の達者なのを見ると我々はいやになる。併し読んでもと楽だから読んでも。だから大衆物の方が読んで『よいものじゃないけれども、六十点か七十点から面白味は持っているけれども、とにかく面白味があるに違いから大衆物に初めからかかる。真面目に書いた文学というものは読んでてきりがいい。こつちの期待に叛かれる』<sup>(90)</sup>のを沢山読されるからやはり大衆作家というのがこの点信頼を置かれてゐる。やはり大衆作家というのや、本格的な文学というものはきりがいいことだけれども、低い大衆が読んで行くのはあつたものネ。併し、作家』<sup>(91)</sup>になれば結局押しつまつたならば一生懸命に書いていけるような小説を書いて非常にあつけないものができたりするが、大衆

小説を書いてゐる間楽しいと思う。平林さんが書くのを見ると、楽しいという気持があるらしい』<sup>(92)</sup>という気持がする。私らもそれは無為に大衆小説を見まして、その変り併し、名前なんか知らない。名前見ずに読んでいた。そういうものが、やはり一葉にやはり信用できない小説を見せられました。やはりむしろ初めから『ワット笑つたりするようなものを欲する傾向がありますね。

平林 だけれども私由起さんについて、<sup>申上げるとすれば、</sup>つまり私共『のやうな作家』は私生活というものに密着してしまつて、それを離れるだけの力がないのです。』<sup>(94)</sup>『その点』男の人は多かれ少かれ実生活というものから或る程度離れて抽象的に生きる力を持つてゐるのです。併し我々は實生<sup>が</sup>活に密着してしまつて、<sup>の経験の中だけ(一)生きて来た人間ですからね。</sup>一回も離れる力を持つていないのです。併し、あなたは或る程度実生<sup>生活が</sup>活というものから離れ『られ』る氣<sup>教養と</sup>持つていらつしやるのです。

由起 そうでしょうか。併し、それが余りこまめでないから……。

平林 曲本の家庭生活と<sup>歌集</sup>アメリカの生活』<sup>(96)</sup>『に』は『木まき』<sup>違ひ</sup>まき<sup>あつた</sup>けれども、とにかくいゝわゆる大衆の作家『これは、日本の婦人作家が、どんな土壤から出てゐるかといふこと、関連したことで今までの所では半ば運命的なことでしたが、それでもそれでも』、<sup>野上</sup>深尾さんとか宮本さんなんかは別々<sup>な</sup>『生き方ができま』して、<sup>(た)</sup>背実生活という密着して、女の生活の自由と人間性というものを束縛し過ぎたと思うのです。併し、それをあなたは離<sup>(97)</sup>れて抽象的に生きる<sup>おできになる</sup>こととおつちやつたので、私も『いはゆる教養といふものについては』

しらと思うのですけれども、ただあなへた」音楽を勉強されて、さういふものから《は》御自身がおすさんをも、感情や情緒を形成されてゐるし、七過からの御身分も、食べるとか住むとかいふことから持つてゐるわけでは本々です。『さういふうんいきを空気のようにならぬ』一心離れて思想や感情を伸ばすつもりをもちつたと云ふのです。『さういふものがあなたの中にある』

《そのものを醸してゐる》と思うのです。『さういふものが我々にはない』成人したのちゆゑ自分で幾らか本を読んで若干の知識というものを《もつてはゐます》が、それも教養というものには『ならない』すので、その点あなたは非常な幸福な環境と、それから……。

由起 幸福かどうかは最近……。

折口 幸福というと怒りましょうよ。(笑声)

由起 私が幸福でいるかどうかは自分のこととですから……。

平林 女が実生活から離れないということが、男より劣っている点じゃないかと思ひます。

由起 私も赤ちゃんにおっぱいを飲ませた<sup>(99)</sup>り、子供の世話ということとか、そういうことに關しては本当に離れるどころじゃない。本当に密着している氣持なんですけれども、それ以外に男の人に務めるとか、何とかといううなことは、そんなことはとかく半ば<sup>(100)</sup>な性格を持つてゐるのじゃないかと思ひます。務めるということは、何か外のことので以て変えることができる。世話女房という者があつて何から何までお世話を、靴下も靴も履かせるとか、そこまでする必要で、そういうことは『しないで落ちついてゐるのがよいのか、そういう見解を一々させて行けば、女と男の人の愛情というもので必要欠くべからざるというものは台七 「おすさんを持つてゐるわけでは本々です」の右傍に鉛筆で囲むように」の形で線を引き、右上に「？」を記載。

所の仕事とか、いろ／＼なものがつきまとつたりするような、『さういふうな』<sup>(101)</sup>ころは余り許されることではないかしらと私は思うのです。今まで習慣では出掛けるときにオーバーを着せるなどということもありましようけれども、それは習慣であつて、若しそういう習慣がなければそんなことは愛情の『印』<sup>(102)</sup>ではなだらうと思ひます。併し、皆奥さんという者は、さういふふうにい／＼なことをするといふ習しがあるもので、それをしなければ愛情がないといふふうに決めてしまふ。さういふことで愛情を指定されるということ<sup>(103)</sup>は間違ひなんです。

平林 世話女房というのは『――』、どんなに《夫に》オーバーを着せかけてやつても《やらなくとも》、世話女房と世話女房でないのと二つあると思うのです。『さういふ世話女房』<sup>(104)</sup>というのは、『せまい日常生活の』仕事にしがみつ<sup>(105)</sup>いたきり話でできないといふ世話女房というのはよい

《ものといふ》ことになつてゐるのですけれども、世話女房の例えは愛情といふものにはついて、どちらかといへば、み／＼ちい花の本などでは飾の花などといふようなものであつて、美しい花の咲いたような、バラの花の咲いたような愛情<sup>(106)</sup>というものじゃない。

由起 それはよく分ります。花が咲いたようなものというものは、形の上でも心の上でも相方なのですか。そうではなくて心の中で花が咲いたのでしよう。<sup>(107)</sup>

平林 そうでしよう。併し言葉で言い表せないのですけれども、若し自分の御亭主が酒を飲んで酔つぱらつて、よその男と喧嘩をしてゐると聞いて、はだしで飛び出して行くといふようなおかみさん、それも美しい愛情<sup>(108)</sup>です。併し、我々の夫婦愛というものは、さういふものじゃ『ありたく』ない。むしろ酔つぱらつて喧嘩してゐる亭主をじろつと見るよ

うな、そういうものに我々はあがれている。ところが私なんぞはただで飛び出して行く方なんです。』<sup>(11)</sup>

**由起** 私もはだしで飛び出して行く方なんですヨ。(笑声)「一字空白」そう有りたいものだと思っております。大体そういうふうには……。

**白田** 直ぐに飛び出せるか、飛び出せないか……。 (笑声)』<sup>(12)</sup>

**平林** 沢さんの相手の御と書いましてか、お里ですか、あの人は高く評価してよいと思います。お里自身であるということとは、随分違うでしょう。そこだと思ふのですよ。

**由起** それは何か私も非難されてよいこと』<sup>(13)</sup>はあるのですけれども、私が冷い人間だというふうに思われることは、本当に私は悲しいと思ひますのヨ。

**平林** いえ……。私は非常にあこがれているのですから……。』<sup>(14)</sup>

**折口** 「すまし」型と「ぎくばらん」型ですネ。

**平林** 併し、そうなれば私はぎくばらんの方になるのです。

**折口** やはり本体論になるけれども、それから離れられな<sup>つた</sup>ので、平林さんの話としげ子』<sup>(15)</sup>さんの話と本体が違うのだと思ふネ。

**白田** 確かに本体は違いますネ。

**折口** 先のことは私には分りませんけれども、つまり批評でも書いて見なければ分らないし、期待して書くような批評なんというも』<sup>(16)</sup>のはほんの僅かのことしか分らない。批評というものも、作家の或る面を支配するものでなければ批評でないのだから、だから実際批評のことは分りま

八 上部欄外に、黒ペンで「こゝの所いま一度速記の原稿みて下さい。わかりません。」と記載。

せん。併し、歌とか小説と非常に離れているけれども、歌が一つの面か』<sup>(17)</sup>ら今までの日本の女流文学の形に出ておりますから、だから歌で言うたらあれは分りやすいかも知れませんネ。岡本かの子さんは、あの歌をやっていたら生涯実力が分らないでしょうね。かの子さんに我々も一諸になつて』<sup>(18)</sup>雑誌を出そうなんということを相談したのです。岡本かの子さんはコツ／＼とした人じゃないけれども、我々そう思っていたのです。それでまだかの子さん何か計画したけれども、結局歌の方は思い切った。それから何分書』<sup>(19)</sup>いて、相当なものを書いた。それで私あれだけの人になるとは思いませんでした。まだどうかすると、かの子さんに世間が高く評価し過ぎていたのではないかしらと思うぐらいかの子さんのそういう点ばかり見ている。併し』<sup>(20)</sup>あの歌で言っていたから悪いので、今後小説なんかに行く人だったのでしょうネ。だからあの人は抒情的な人なんだから、抒情的にもう自由に行けるのに、抒情的になり切って行けないのでしょうか。丁度あの時分にかの子』<sup>(21)</sup>さんだとか、あの今井邦子さん、(つまり)山田邦子さん、市倉節子さんという人で「あららぎ」をやつて来た。あの時分に、つまりあららぎ時代、低い人から喜ばれないような固い文学を見るけれども、女の女は着いて行けなかつた。だ』<sup>(22)</sup>から「あららぎ」が出た後に、確信は皆持っていたと思うのです。労苦を追つてしまつて、日本の歌に一葉などの労苦というものがなると可笑しいので、昔は、あれ程女が歌を作つて、我々歌を考えたときに歌を考えられもの<sup>(23)</sup>だか』<sup>(24)</sup>ら、真面目な女が歌を作るということは間違いでないネ。女が作った歌もよいということも間違いでないネ。とにかく明治の末から、大正、昭和と騰つて来たあららぎ時代は、あれは歌に

違う。晶子さん時代が、あらら<sup>(126)</sup>」ぎ時代に入って、やはり避けられてしまった。これで抒情文学というものが、このところで又復興しない。未だに女の人は抒情以外の新しいものを発見していない。男の方は、何かかんか外の方に行っている。女は無氣力<sup>(126)</sup>じゃないのだ。昔からあららぎ時代を通じて来たから無氣力じゃないのだから何かよいものを発見して貰いたい。かの子さんの文学の「よさ」というものは、「よさ」というかどうか……、皆なが受取っているところは、抒情的なところ、抒情的なところで受取られているのだから、或いは一番簡単な考え方から言えば、抒情的なものと力を得て来るだろうと、その抒情的なものというものは、やはり昔の抒情的な足を深く見ているような小説はもういけ<sup>(127)</sup>ない。何か形が幾らか変って来るだろうと、それだけ分るけれども、それから先のことは分らない。

**平林** 私共、小説を書く前にあららぎ派の或る一面で非常に教えられたのでございます<sup>(128)</sup>。』

**折口** 今まで朝廷についての文学はありませんし、だから女は皆な潰れてしまったのです。歌ではそろ／＼女は生き返ったんだらうと思いますけれども、それが小説の支配になるかどうか分りません<sup>(129)</sup>。』

**白田** 斉藤茂吉の歌なんかについて、何かお考えがあるでしょうネ。

**平林** 私は斉藤茂吉《さん》の歌は若干<sup>「赤光」から</sup>ですが、「朝の歌」<sup>「あたりまで」</sup>なんというものは、全部見せて頂いておりますけれども、この後の歌は斉藤さんの歌<sup>「こゝろ」</sup>として、或いは曲分の<sup>「どうでございませう。」</sup>当分の歌を選していらいっしやいますネ。どういふ歌が選ばれているかということ、あの<sup>「方」</sup>《この頃の》志が分るような気がするのですネ。

**折口** ただ沢山見ていると、こんなつまら<sup>(130)</sup>ん歌というところがありますネ。それが誰れにでも批評の頓智にそれが出て来ましたから、やはり困るでしょうネ。そうすると斉藤さんのを読んでいると、とんでもないことを言いますネ。斉藤さん自身は立派なものを作り<sup>(131)</sup>ますネ。それが今でもできるものだから偉いのですネ。

**白田** 平林さん<sup>「まご」</sup>この間大宰府の天満宮においでになりましたが、終戦直後の二十一年<sup>「まご」</sup>でしようか<sup>(132)</sup>。』

**平林** 二十<sup>「四」</sup>年頃でございます。

**白田** あそのこの宮司というものが非常に熱情家で、その人が終戦直後非常に失望しておったというのですネ。天皇尊敬の問題ですか<sup>(133)</sup>。』

**平林** こういふことを言っておりました。天皇がキリスト教に帰衣<sup>「依」</sup>されるという噂があるが、それでは、自分達の、天満宮の仕事、理想はもう無駄だということをおられましたけれども、私は絶対<sup>(134)</sup>にそんなこととはありません。私はそういうことを聞いたことはありませんけれども、天皇がキリスト教に帰衣<sup>「マヤ」</sup>するということはありますから、《と》私は何も証拠はないが、《絶対<sup>「マヤ」</sup>に》保証<sup>「します」</sup>する<sup>「かゆ」と言つたら、</sup>そうですかと、信用していませんでし<sup>(135)</sup>」たけれども、後になつたらお分りになったと思います。

**白田** そういう話で、信仰というものの実質というものを非常に突かれたお話で、そういうところに又美讓型、謙讓型というふう<sup>「賢女」</sup>に『言われる<sup>(136)</sup>』  
九 □は直接黒ペンで「四」と上書きされているため、原表記が「二」か「三」か判読不明。

一〇 傍記は鉛筆書き。□は判読不明。「美讓」を「美女」に訂正する際、「美」は同じであるということを示した記号力。



ることはできませんけれども、併し、その次の『生活』というものが、どんな形で出るかですネ。随分これはまあ難しい問題かも知れませんが、由起さん、フランスなんかの方の家庭生活はどうでございましょうか。

**由起** 私はフランスの家庭生活はよく存じ<sup>(18)</sup> ませんけれども、やはり日本の生活と同じこととてございましょう。それは一般普通の考え方で、やはり何か専門家という人ですがネ。ピアニストとか、科学者とか、作家であるという人は存じませんが、そういう人は『生活』というのから、作家というために沢山時間を取ってもよいという了解がございします。又沢山取らなければ仕事ができないという程度のものじゃないかと思ひます。まああの方は何か文章を書かとか、そういうことを言わ<sup>(19)</sup> れている程度では衆の中に出ることができない程度で、やはり男の人がすること、時間において劣つて、少しの時間をさいて世の中に出て行く程度ですから、廻りの人が、それに志したということを認められないから、そ<sup>(20)</sup> れと同時に、それにつきまとつてまで時間というものを求めなかつたと思うのです。それで結婚をするときに、お互いに話合つて結婚するか、或いは結婚しないかというようなことで、随分家庭生活というものを考えさせら<sup>(21)</sup> れたと思う。ただ初めからそれはそれで、女の人でも気持が変るか知れませんが、それはそのとき考えて、一番妥当な条件を決めればよいので、そういう人は、やはり結婚する前にそういう志を持つていて、結婚すると『き』に勉強するとかという気があれば、それはやはりどうして行けばよいかということを真剣に考えている。それを飾り物として考えるならば、それは家庭生活の中で楽しめる範囲内

です。女の人だつて、やはり飾り物とい<sup>(22)</sup> うような態度で考えているのじゃないと思ひますから、それに必要な時間与えなければならなと思ひます。さつき清小納言のときに、装飾品というようなことをおっしゃいましたけれども、そのときは、私はよく存じ<sup>(23)</sup> ませんけれども、装飾品というような気持で、書くことはしないでしうけれども……。

**平林**<sup>(24)</sup> あの装飾品というものは、小林さんとのあのときに、結局、大貴族に比べると、道真も女流作家も装飾品であつたと、■大貴<sup>(25)</sup> 族はもつとおうらかな生活の中にあつた。そういうのが一流で、併し、今までの仕事<sup>(26)</sup> がらすれば、一流の仕事というものは殆んど残つてなくて、装飾家というものが残つてゐる。

**折口** その装飾家つていうのは意味が面白<sup>(27)</sup> いのだらうネ。しげ子さんの意味でない。大貴族の生活は、普通の生活から言えば生活できるのだけれども、日本の伝統から言つと、それができないというようなものですネ。そういうもので言つたのでしようネ。あなたの『言うておられる、そういう女の装飾とか、そんな意味でない。

**由起** 昔のやはり宮廷文学とか、ああいう意味での装飾という意味でしようか。

**折口** もつと深い意味がありました。つ<sup>(28)</sup> まり日本の昔の平安朝時代

一一 清少納言に関する話は当該原稿内に記載無し。

一二 「平林」を鉛筆と黒ペンで二重に取り消し、鉛筆で由起の発言の後に後続の文章を続けることを指示する修正線あり。

一三 小林に関する話は当該原稿内に記載無し。



は宗教的な　つまり家には（坐子）<sup>？</sup> 婦女がいなければならぬ。大きな家の主人は皆婦（巫）女ですネ。だから天子の皇女という者は結婚しないのが原則だったのですヨ。結婚しないわけにいかないから、『皆よ（64）

そにお客にやるという形で結婚させられた。そんなふうに貴族の身邊についている女房及び女達も、やはり一つの坐子として家庭におったのですネ。段々それが長い間に別の意味を生じて来て、文学や歌を作ったり、そ（66）れから手紙を書いたり、音楽をしたりするようなふうになって来ました。併し、それを直接の目的に段々になって来るけれども、今度はそういう名目的な、婦女的な旦那の許可されないと、貴族の家庭という関係でできない（66）』という、そういう意味でしょう。

となつたのです。  
 平塚さんの頃の風俗・習慣・制度への抵抗は、主として感情的  
 史であり、それから、その開放女性の彼等の何と言いますか、始めに情的

一四 「短<sup>か</sup>った」の「か」の取り消し線は鉛筆。

ども、「明星」というものが命が短つた、与謝野さんの命が短つたということは、随分考えさせられると思う。又我々の命が永いということば考えさせられると思ひますネ。」<sup>(一五)</sup>

**折口** 夫の鉄寛<sup>(マ)</sup>とフランスに行つて来て、行っているうちから駄目になつて、帰つて来ては生涯駄目でした。ただ達者に作っているだけで、どの歌見ても拙い歌ばかりでした。ただあの人は始終競争しておつたのですネ。<sup>(一七)</sup>鉄寛は生活に毀れて、それで晶子<sup>(マ)</sup>がその場合だけの今日にしたのですネ。併し、それで鉄寛負けてしまつて、それで晶子さんも伸びなかつたのですネ。だから晶子さんも存外短つたのですネ。<sup>(一八)</sup>

**白田** 折口先生も現近「二字空白」<sup>(マ)</sup>〈右傍に「シヨウシュウ」〉のような一つの変化を、やはり講義で示しておられるわけですが、或る意味で、やはり人間としての掘下げということが普断に行われ、最後まで行われる人にも、やはり歩みを止めた抒情<sup>(一七)</sup>詩、そのものの運命であるかも知れんけれども、或いはもう一つ、それをもつと抒情詩が人間を生み出しているのですから、人間の掘下げの範圍であつたか、どこまでも追求して行くかということでも、又考え直されるんで<sup>(一八)</sup>はないのではありませんか。

**平林** その追求というものは、抒情詩ではないんですからネ。詩なんというものは求めたら生れて来るもので……。

**白田** つまり歌や詩の中でなしに、人間の『生活の中ですよ。そうすると、もつとその点は長い生命が得られるのではないか。そうでないと結局従前の抒情文学だと……』

一五 176ページは、用紙全体に黒ペンで斜線を引いて取り消し。

**平林** それは幾分違いますネ。抒情詩というものは、ああいうはかないものだと思は考<sup>(一八)</sup>えているのでございませうけれども、併し、それを苟くも一生の仕事とするならば、そういうものに頼らないで、もつと外のものに頼らなくちゃならんと私共の悲哀<sup>(一六)</sup>を考へているのでございませうけれどもネ。<sup>(一八)</sup>

**折口** 抒情詩というものは「四字空白」〈強さが加わら〉なければ駄目なので、どこまでも下らないように強を加えて行くといふことはできませんから、やはり駄目になる。それは「あららぎ」見たいに生じていると、平凡な話だけれども、材料<sup>(一八)</sup>一つも尽きないからネ。材料尽きない限り、その持つ見方はちゃんと變つて行くからネ。ともかく歌は女の時代が又一遍来ると思う。

**白田** 小説の方では、明治のときには、女性文壇は、どうも非公式……。

**平林** 女性が怒るでございませうネ。

**白田** ああいうふうな女性文壇、女子を送り出す、そういうものは初めはございませうけれども、婦人文壇というようものが出たけれども、あれを随分新しい性格を持つて<sup>(一八)</sup>いるように思ひますネ。今はああいうものは出ませんしネ……。そういう一種の文芸を保護するといふか、そういう特殊な保護者が出て来るといふことも、<sup>(一七)</sup>それは非常な學問的なことも知れませうけれども、必要かも知れ<sup>(一八)</sup>ないですネ。

**平林** ただ明治時代の場合は、女の出口というものが塞がれておりまし

一六 「悲哀」の右傍に「？」とあり、その上から鉛筆で取り消し線を引く。

一七 取り消し線は鉛筆。

たから、意味があつたかれ知れませんネ。今では出口は塞がれておりません。それで余り出て来ないといふうのですから、非常に事情が違ふのですヨ。

**折口** 併し、それを出させる批評家が悪いのでしょうか。批評家が男（女）のことは悪口書くけれども、あれは批評家がポーズを調えているのでしよう。ともかく真面目な人でも男のも『のなら悪く書くけれども、とにかく認めていると。女の人には頭から軽蔑してかかっているのが、女の人を出せない理由……』

**平林** そうでございます。女の人を非常に軽蔑しております。』

**折口** だから軽蔑しにくいものだ……、とにかくあの態度を批評家がやめて呉れなければ、女の文学は非常に不幸だと思ひます。

**由起** 又考え始めれば、そういうことも計算の上で生きて行かなければ、到底生きて行けないでしょうネ。男の方でもそうでしようけれども、女だったら余計そうじゃないでしょうか。併し、批評を気にしておつてはしょうがないと思ひます。それも一つの条件だと思ひます。』

**折口** 併し、批評のことも何だけれども、ともかくよい批評でも、悪い批評でも問題になるものは、ジャーナリストが問題にするのだから、ジャーナリストから悪口を言われても生きて行けるわけです。基準として立って『いるわけだけれども、その批評家の言うことに対して、ジャーナリストがこれに着いて行けばよいことになるネ。やはり作家は考えなければならぬと思う。併し、それよりは作家は、やはり成金的に育つて行くといふ』ことが必要だと思ひます。成金時代に自重ということは考えもつたらんから、仕事において、女性作家は成金時代、その

成金時代には何を貰つてもよいのだけれども、時代の強さによつて押し出されている。だから女が萎靡して『いる時代は駄目なんです。だから或いはそんな意味で我々が求めるでなしに、大いに我々をおだてて呉れる力があれば、我々も生きれるでしょうネ。

**平林** 確かにそういうところがありましょうネ。

**折口** 桃山時代とか元禄時代という性格を見ると、こんな時代にくる／＼な作家が出てくるのだが、明治時代には作家が萎靡沈滞して出て来ないのです。』

**白田** まあ結局そうなると、国の運命全体ですネ。若しくはやはり一種のルネッサンス化といふか、日本全体が、特にこうして戦いに敗れてしまつたといふのですからネ。併しながら、やはり起ち上る力といふものを、ど『うしても使わないといふと駄目だといふことになるのじゃないでしょうかネ。

**由起** 何か木に実がなつてゐるようでございますネ。

**平林** そのままあるといふ時代には、どう』も果樹が育たないようですネ。

**折口** 我々はそういうふう上空想しますけれども……。

**白田** 明治の初めでも、皇后様が津田さんの何だの五人も、非常に若い人を留學生に『送り出して、日本の婦人のために尽せといふことをおつしやられた。そういうことが、やはり御皇室で作るとか、何とかといふことでなしに、皆んなでできてよいのではないか。文芸院のようなものも臈筆（官僚）で作つたらおしま』いで、民間で……。フランスの文芸院といふものは、そういうのじゃないでしょうか。

由起 私よく存じませんノ。

白田 民間でもっと出て来るとよいと思います。官吏によって支配されては、大きな夢<sup>(282)</sup>が伸せない。やはりもっと国民全体の中から出て来るようにしたいものですネ。

平林 <sup>は</sup>明治以後<sup>は</sup>は政府の援助<sup>の外で</sup>が出たから繁栄したのです。尤、この前の社会党の内閣の時に、片山さんが一万円文<sup>(283)</sup>芸家協会に出すから、誰か受賞者を選衡しろというようなことを言っておったのですネ。このインフレ時代に……。 (笑声) 「一字空白」全くケチな時代なんですノ。

白田 どうも淋しい話になったのですけれ<sup>(284)</sup>ども、まあこれは……。

平林 まあ私は文芸が発達しない時代は悪い時代と、<sup>簡単に</sup>そう<sup>も</sup>言えないと思うのです。<sup>ある一定の社会制度が伸びやうとして社会がむりをしてゐるくことが</sup>衰微時代<sup>(285)</sup>は文芸というものに力を裂かないで、<sup>その社会の事情を越えその社会で文芸</sup>て伸びてよいという意味である<sup>(286)</sup>《できないこともあると》思うのです。<sup>さうした事情等で</sup>文学<sup>(287)</sup>というものがあれしなのですから、いわゆる文学が伸びないから、悪い時代とは簡単に言えない。そうじゃないでしょうか。

白田 まあそういう希望を持って、我々勉<sup>(288)</sup>強して行きたいと思っております。尚皆さん折口先生に何かお尋ねすることはありませんか。

平林 何を伺つてよいかわからないものですから……。

白田 それでは、この辺で……。どうも有難うございました。

「以下空白」<sup>(289)</sup>